

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第4集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅳ

# 竹 松 遺 跡 Ⅰ

2 0 1 7

長 崎 県 教 育 委 員 会

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第4集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

IV

たけ まつ  
竹 松 遺 跡 1



(国土地理院電子国土webより作成)

2017

長崎県教育委員会

中表紙写真 国土地理院電子国土 web

URL :

[http://maps.gsi.go.jp/?ll=37.666429,135.373535&z=5&base=std&cd=f0%2Ff0\\_10&vs=c1j0l0u0&d=1#5/33.092646/130.402879/&base=std&ls=std%7C\\_ort&disp=11&lcd=\\_ort&vs=c1j0l0u0f0](http://maps.gsi.go.jp/?ll=37.666429,135.373535&z=5&base=std&cd=f0%2Ff0_10&vs=c1j0l0u0&d=1#5/33.092646/130.402879/&base=std&ls=std%7C_ort&disp=11&lcd=_ort&vs=c1j0l0u0f0)



調査区遠景（南東から）



調査区全景（右が北）

# 序 文

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書として、平成23年度に実施した竹松遺跡の調査成果を取録したものです。

竹松遺跡の調査では、縄文時代から近世にかけての遺物が出土しました。これらの発見と詳細な観察により、縄文時代から近現代までの竹松地区の歴史をたどることができました。

県教育委員会は、これまでも各種開発事業において、協議・調整を重ね文化財保護に尽力してまいりました。九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設事業につきましても、建設計画当初より可能な限り保存に努めていただくよう独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構および関係機関との協議を重ねた結果、建設工事に係る遺跡を記録保存する運びとなりました。

本書を刊行するにあたり、鉄道建設・運輸施設整備支援機構、発掘調査に携わった方々をはじめ、多大なご尽力・ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

また、本書を文化財保護ならびに地域の歴史を学ぶ資料として活用していただければ幸いです。

平成 29 年 2 月

長崎県教育委員会教育長  
池 松 誠 二

## 例 言

- 1 本書は平成23年度九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る竹松遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査区は大村市竹松町1021番地他に所在する。
- 3 竹松遺跡の本調査の出土遺物の洗浄・分類・注記・接合、遺物台帳の作成、報告書掲載遺物の実測は新幹線文化財調査事務所竹松および久原現場事務所において行った。
- 4 本調査での現場記録は川畑の指示の下、写真撮影・実測図作成を調査員が行った。
- 5 本報告書の作成は浦田と文化財調査員堀内和宏・東郷一子とで行った。また、文化財調査員江口喬裕、新久保恒和の協力も得た。
- 6 本報告書の執筆担当者は本文目次に（ ）で示している。
- 7 本報告書の掲載遺物の撮影は浦田が行った。
- 8 本報告書の編集は浦田が行った。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
ビット…SP 溝…SD 井戸…SE
- 10 本書の作成にあたり以下の文献を土器等の編年の基礎資料として用いた。  
縄文土器：水ノ江和同『九州縄文文化の研究』雄山閣2012  
弥生土器：柳田康雄『九州弥生文化の研究』学生社2002  
甕棺：橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣2005  
土師器：柳田康雄「九州土師器の編年」『九州弥生文化の研究』学生社（初出1991）2002  
須恵器：舟山良一編『牛頭窯跡群 総括報告書』大野城市文化財報告書第77集2008  
貿易陶磁：山本信夫『大宰府条坊 XV』（太宰府市の文化財第49集）太宰府市教育委員会2000  
瓦質土器：荻野繁春『解説 東播産須恵器系陶器の編年』私家版1988  
石鍋：木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」1993（中世土器研究会編1993『中近世土器の基礎研究9』所収）
- 11 本書で用いた座標は世界測地系である。
- 12 本書で用いた方位は座標北である。
- 13 遺跡調査番号は TAK201108である。

# 本文目次

I 調査の経過	
1 調査に至る経緯	
(1) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要	
①概要	1 (古田)
②沿革	1 (古田)
(2) 調査に至る経緯	5 (浦田)
(3) 範囲確認調査の経過	5 (浦田)
①調査区	5 (浦田)
②土層	5 (浦田)
③遺構・遺物	6 (浦田)
④結果	6 (浦田)
2 調査組織	7 (浦田)
3 調査の方法	7 (浦田)
II 地理的・歴史的環境	
1 地理的環境	9 (浦田)
2 歴史的環境	10 (浦田)
III 層序	
1 土層	10 (浦田)
2 基本層序	10 (浦田)
IV 遺構と遺物	
1 溝状遺構	13 (浦田)
2 井戸	14 (浦田)
V 遺物	
1 II a層の遺物	
(1) 土器	16 (東郷)
(2) 石器	17 (東郷)
(3) ガラス玉	17 (浦田)
2 3・4・5a層の遺物	
(1) 土器	
①3層の土器	18 (新久保)
②4層の土器	20 (江口)
③5a層の土器	21 (新久保)
(2) 石器	22 (江口)
(3) 緑釉陶器	24 (堀内)
(4) 紡錘車	29 (浦田)
(5) 耳環	29 (浦田)
(6) 鉄鏝	31 (東郷)
3 III層の遺物	
(1) 土器	32 (堀内)
(2) 石器	34 (堀内)
4 IV層の遺物	
(1) 土器	35 (堀内)
(2) 石器	35 (江口)
VI まとめ	36 (浦田)

## 挿図目次

第1図	九州新幹線西九州ルート概要図	1
第2図	保守・車両基地概略図	5
第3図	範囲確認調査試掘坑配置図	6
第4図	TP7、TP30土層図	6
第5図	グリッド配置図	7
第6図	竹松遺跡調査区周辺地図	8
第7図	竹松遺跡周辺地形および 遺跡分布図	9
第8図	F-1～4区北壁土層図	11
第9図	B-1区～F-1区東壁土層図	12
第10図	遺構配置図	13
第11図	SD01出土土器実測図	14
第12図	SD01・02出土土器実測図	14
第13図	SE01実測図	15
第14図	SE01出土土器実測図	15
第15図	II a層出土土器実測図	16
第16図	II a層出土土器実測図	17
第17図	II a層出土ガラス玉実測図	18
第18図	3層出土土器実測図	19
第19図	4層出土土器実測図	20
第20図	5a層出土土器実測図	21
第21図	3・4・5a層出土土器実測図	23
第22図	3層出土緑釉陶器実測図	24
第23図	紡錘車実測図	29
第24図	3層出土耳環実測図	30
第25図	鉄鍬実測図	31
第26図	III層出土土器実測図	33
第27図	III層出土土器実測図	34
第28図	IV層出土土器実測図	35
第29図	IV層出土土器実測図	36
第30図	九州新幹線西九州ルート(長崎ルート) 大村車両基地発掘調査区位置図	38
第31図	大村車両基地内遺構配置図	39

## 写真目次

巻頭図版1	調査区遠景	
	調査区全景	
写真1	SD01(東から)	13
写真2	SD01出土土器	14
写真3	SD01・02出土土器	14
写真4	SE01(西から)	15
写真5	SE01出土土器	15
写真6	II a層出土土器	16
写真7	II a層出土土器	17
写真8	II a層出土ガラス玉	18
写真9	3層出土土器	20
写真10	4層出土土器	20
写真11	5a層出土土器	22
写真12	3・4・5a層出土土器	22
写真13	3層出土緑釉陶器	24
写真14	紡錘車	29
写真15	3層出土耳環	30
写真16	鉄鍬	31
写真17	鉄鍬X線写真	31
写真18	III層出土土器	33
写真19	III層出土土器	34
写真20	IV層出土土器	35
写真21	IV層出土土器	35
写真22	作業風景1	37
写真23	作業風景2	37

## 表目次

表1	竹松遺跡土層対応表(南部)	10
表2	SD01出土土器観察表	14
表3	SD01・02出土土器観察表	14
表4	SE01出土土器観察表	15
表5	II a層出土土器観察表	17
表6	II a層出土土器観察表	17
表7	3層出土土器観察表	18
表8	4層出土土器観察表	21
表9	5a層出土土器観察表	21
表10	3・4・5a層出土土器観察表	23
表11	北部九州内緑釉陶器出土遺跡一覧	25
表12	群馬県内における紡錘車の変貌	29
表13	3層出土耳環観察表	30
表14	鉄鍬観察表	32
表15	九州内の雁股鉄鍬類似例	32
表16	III層出土土器観察表	33
表17	III層出土土器観察表	34
表18	IV層出土土器観察表	35
表19	IV層出土土器観察表	35
表20	九州新幹線西九州ルート(長崎ルート) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査履歴	37

# I 調査の経過

## 1 調査に至る経緯

(1) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要

### ①概要

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）は、福岡市と鹿児島市ならびに長崎市を結ぶ整備新幹線計画（九州新幹線）のうち、福岡市と長崎市を結ぶルートを指す。

博多駅～新鳥栖駅間（約26 Km）は鹿児島ルートと路線を共有し、新鳥栖駅～武雄温泉駅間（約51Km）は在来線を活用する。武雄温泉駅～長崎間（約66Km）はフル規格の新線で、フリーゲージトレインを導入して2022年度内の開業を目指していたが、フリーゲージトレインの開発が遅れ、2022年度までの量産化が間に合わないことから、在来線と新幹線を乗り継ぐ



第1図 九州新幹線西九州ルート概要図（大村市HPより）

「リレー方式」で2022年度内に暫定開業することとなった。

営業主体は九州旅客鉄道（JR九州）、建設主体は鉄道建設・運輸施設整備支援機構（鉄道・運輸機構）である。

車両基地は本県大村市の竹松町・沖田町付近に建設され、県内駅は長崎、諫早、新大村（仮称）である。

### ②沿革（長崎県ホームページを一部改変）

#### 国鉄時代

1973年（昭和48年）

11月：全国新幹線鉄道整備法に基づく整備計画路線として決定、建設の指示。

1985年（昭和60年）

1月：博多～長崎間（早岐回り）の駅・ルートの概要を公表。

1986年（昭和61年）

9月：博多～長崎間（早岐回り）の環境影響報告書案の公表。

## JR 九州発足後

1987年（昭和62年）

- 4月：国鉄分割・民営化（JRの発足）
- 10月：長崎市・佐賀市に着工準備作業所設置。

1992年（平成4年）

- 11月：新ルート案（短絡ルート）を地元案として決定。

1996年（平成8年）

- 12月：整備新幹線の新しい基本スキーム決定上下分離方式により、JRは受益の範囲を限度とした貸付料を支払う。

1998年（平成10年）

- 1月：政府・与党整備新幹線検討委員会結果  
武雄温泉から新大村（仮称）間の駅・ルート公表を速やかに行い、引き続き環境影響評価に着手するとともに、長崎駅の駅部調査を開始する。
- 2月：武雄温泉～新大村（仮称）間の駅・ルートを公表。
- 5月：長崎駅部構想調査の開始。
- 10月：武雄温泉～新大村（仮称）間の環境影響評価着手。

2000年（平成12年）

- 3月：長崎駅部構想調査委員会取りまとめ報告。駅位置、規模の大枠決定。
- 11月：環境影響評価準備書に対する知事意見の提出。
- 12月：政府・与党整備新幹線検討委員会結果（政府・与党申合せ）  
武雄温泉～長崎間について、環境影響評価終了後、工事実施計画の認可申請を行う。  
鹿児島ルートにおいて、交通結節点として、新鳥栖駅の整備を行う。  
今回着工を行わない区間については、社会経済情勢、国・地方公共団体の財政事情等に照らし、東北新幹線盛岡・八戸間（H14年12月開業）及び九州新幹線新八代・西鹿児島間（H16年3月開業）の両区間の完成後に見直す。

2002年（平成14年）

- 1月：環境影響評価書（武雄温泉～新大村間）・（新大村～長崎間）の送付  
工事実施計画認可申請（武雄温泉から長崎間）

2004年（平成16年）

- 12月：「整備新幹線の取扱いについて」（12月16日 政府・与党申合せ）において、「長崎ルートについては、並行在来線区間の運営のあり方について調整が整った場合には武雄温泉～諫早間に着工する」ことが盛り込まれ、平成17年度予算に10億円の事業費が配分された。

2005年（平成17年）

- 12月：平成18年度の整備新幹線予算の線区別の事業費が公表され、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉から諫早間に、平成17年度と同額の10億円の事業費が配分された。

2007年（平成19年）

- 12月：肥前山口～諫早間を経営分離せず、開業後20年間 JR九州が運行維持することを佐賀県、長

崎県、JR九州の三者が基本合意した。

#### 2008年（平成20年）

- 3月：国土交通省が鉄道・運輸機構に対し、武雄温泉～諫早間の工事計画を着工認可した。
- 4月：肥前山口～諫早間の鉄道施設の資産譲渡・維持管理に係る負担割合を佐賀県1対長崎県2とすることを確認した。
- 4月：佐賀県嬉野市で起工式を開催。終了後、諫早市で建設起工記念式典を開催。
- 11月：鉄道・運輸機構が大村鉄道建設所および武雄鉄道建設所を設置した。
- 12月：整備新幹線に係る政府・与党ワーキンググループが開催され、西九州ルートについては下記のとおり合意がなされた。（概略）
- (1)「新規着工区間」として、九州新幹線（長崎ルート）長崎駅を、平成21年末までに認可する検討を進め、結論を得る。
  - (2)「その他の区間」として、諫早～長崎間について、引き続き検討を行う、なお、肥前山口～武雄温泉間の複線化等を進めることとし、さらにその具体化の方法の検討を行う。
- 12月：平成21年度の整備新幹線予算の線区別の事業費が公表され、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉から諫早間に50億円の事業費が配分されるとともに、新たに長崎駅部や肥前山口～武雄温泉間の複線化を検討する予算も計上された。

#### 2009年（平成21年）

- 10月：国土交通大臣が前年12月の政府・与党合意の新規着工検討区間については、白紙とし、新しい政府・与党で整備のあり方を決めていくとした。
- 12月：「整備新幹線問題検討会議」が開催され、民間資金の活用、並行在来線維持のためのJRの協力・支援が必要とし、費用対効果、沿線自治体の取組等による着工の順位付けを検討するなどの「整備新幹線の整備に関する基本方針」及び「当面の整備新幹線の整備方針」が決定された。
- 4月：大村市に長崎県新幹線用地事務所を設置した。
- 8月：整備新幹線問題検討会議が開催され、「整備新幹線の未着工区間等の取扱いについて」が決定され、西九州ルートにおいては、
- (1) 肥前山口・武雄温泉の単線区間の取扱い
  - (2) 軌間可変電車（フリーゲージトレイン）の取扱い（実用化）が課題とされ、詳細に検討していくとされた。
- 12月：整備新幹線問題検討会議が開催され、「整備新幹線の未着工区間等の取扱いについて」（平成22年8月決定）に掲げる各線区の課題について、さらに詳細な検討を進めることとされた。

#### 2011年（平成23年）

- 10月：軌間可変技術評価委員会において、「軌間可変電車の実用化に向けた基本的な走行可能性に関する技術は確立していると判断される。」と評価された。
- 12月：整備新幹線問題検討会議が開催され、現在建設中の武雄温泉～諫早間と新たな区間である諫早～長崎間を一体的な事業（佐世保線肥前山口～武雄温泉間の複線化事業を含む。）として扱い、軌間可変電車方式（標準軌）により整備し、諫早～長崎間の着工から概ね10年後

に完成・開業とする着工方針が示された。

#### 2012年（平成24年）

4月：未着工区間の収支採算性と投資効果を改めて確認するために、整備新幹線小委員会の報告書がまとめられたことを受けて、整備新幹線問題検討会議が開催され、収支採算性と投資効果について確認がなされた。また、営業主体のJR九州の同意がなされた。

6月：国土交通省が鉄道・運輸機構に対し、武雄温泉～長崎間の工事計画（フル規格）を着工認可した。

#### 認可後の動き

#### 2012年（平成24年）

8月：長崎市で諫早～長崎間の起工式を開催。終了後、建設起工式典を開催した。

#### 2013年（平成25年）

4月：鉄道・運輸機構が、長崎鉄道建設所を設置した。

#### 2014年（平成26年）

2月：フリーゲージトレインに係る軌間可変技術評価委員会が開催され、「軌間可変台車の基本的な耐久性能の確保に目処がついた。」と評価された。

4月：熊本総合車両所において、第三次試験車両（4両編成）がマスコミに公開された。

4月：フリーゲージトレインの性能確認試験が開始された。

10月：フリーゲージトレインの3モード耐久走行試験が開始された。

12月：フリーゲージトレイン第三次試験車両のスラスト軸受のオイルシールに部分的な欠損、すべり軸受と車軸の接触部に微細な摩耗痕の発生が確認されたため、同車両の3モード耐久走行試験を一時休止。

#### 2015年（平成27年）

1月：政府・与党整備新幹線検討委員会が開催され、「整備新幹線の取扱いについて（政府・与党申合せ）」が決定された。

・西九州ルートにおいては、「フリーゲージトレインの技術開発を推進し、完成・開業時期を平成34年度から可能な限り前倒しする。」とされた。

・さらに、九州新幹線西九州ルートも対象に含めて、貸付料収入の前倒し活用等、必要な財源措置を講じるとされた。

8月：依坂トンネル（嬉野市～長崎県東彼杵町、5.7km）が6年の工期を経て貫通。

#### 今後の予定

2022年度中：武雄温泉～長崎間、在来線特急とのリレー方式で暫定開業（予定）。

## (2) 調査に至る経緯

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴い、埋蔵文化財について平成21年7月から鉄道・運輸機構と協議を行い、10月末に分布調査を実施し、23ヶ所において範囲確認調査の必要があることを確認した。

大村市の竹松地区に保守基地が建設されることとなった。それに伴い保守基地予定地は周知の遺跡である竹松遺跡があるため、平成23年から該当地区の範囲確認調査および本調査を実施することとなった。さらに、平成24年6月に保守基地から車両基地へと変更され、その面積も保守基地、約7.7haから車両基地、約11haへと拡大され、現在、平成28年度まで調査を継続実施している。

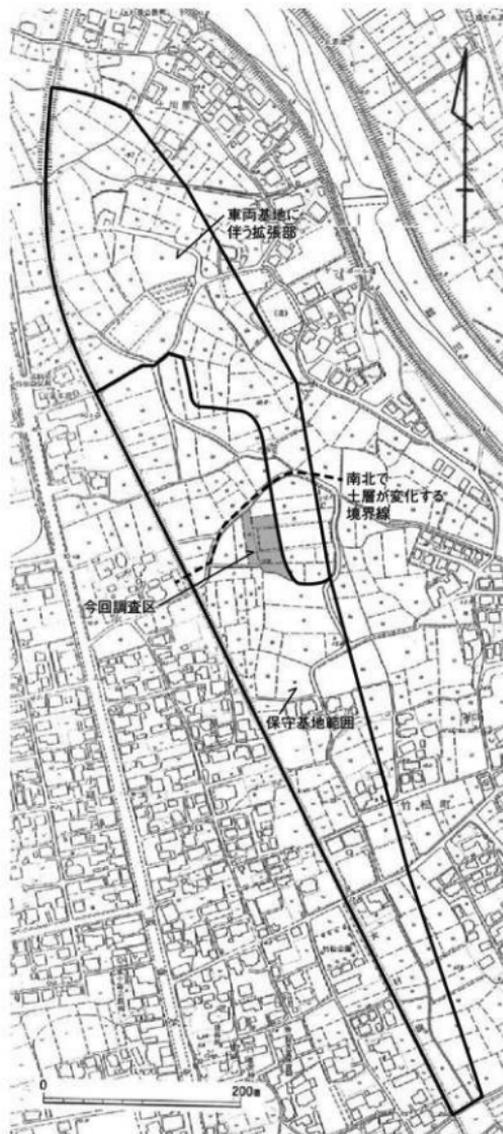
## (3) 範囲確認調査の経過

### ① 調査区

今回の調査では、範囲確認調査と併せて、遺跡範囲外の隣接地において遺跡の有無を確認するための試掘も行った。試掘坑は、座標に合わせて20m×20mの方眼を組み、交点に2m×2mの範囲で55ヶ所を設定した。なお、TP11・14・49は重機による下層確認を実施するため4m×4mに拡張して調査を実施した。

### ② 土層

土層の堆積状況はTP23以北と南で変わる。北側の土層は1層が表土（耕作土）、2層は明褐色粘質土の床土、3層は暗褐色粘質土で粘性の強弱でさらに2層に分割した。4層も暗褐色粘質土で、3・4層から古



第2図 保守・車両基地概略図（1/5,000）

代から中世までの遺物の出土が見られた。5層は褐色粘性砂質土で縄文時代の遺物が少量ではあるが出土した。6層は暗褐色砂質土、7層は砂利混じりの褐色砂層となる。

南側の土層は、1層が表土（耕作土）、2層は褐色土の床土、3層は黒褐色粘質土、4層は黒色土、5層は黒色砂質土、6層は褐色礫層である。遺物の検出は3層から5層で見られた。（第4図）

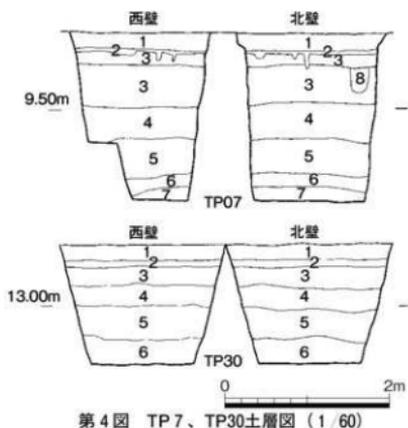


### ③遺構・遺物

遺構はTP1からTP17の多くの試掘坑で古代末から中世のものと思われるピットを検出した。遺物は調査区の北側では3・4層、南側では3から5層で弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器が出土し、北側の5・6層、南側の6層上面から縄文時代の土器や石器が出土した。

### ④結果

今回の調査の結果、耕作面を造成するためと思われる削平が大きく遺物の包含層が薄く、すぐ扇状地礫層となる調査区の南西側を除き、縄文時代から中世までの遺構・遺物の包含地であることが確認された。



## 2 調査組織

竹松遺跡の発掘調査は長崎県教育庁が担当し、発掘調査業務を竹松遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体（埋蔵文化財サポートシステム・扇精光J.V.）に委託した。

調査組織および調査期間・面積は次のとおりである。

調査組織	長崎県埋蔵文化財センター	所長	金子 真二		
		総務課長	北川 和広		
		調査課長	川道 寛		
		調査係長	町田 利幸		
範囲確認調査担当	文化財保護主事	川畑 敏則			
	文化財調査員	宮武 直人	今西 亮太		
本調査担当	文化財保護主事	川畑 敏則	林 隆広		
	文化財調査員	宮武 直人	今西 亮太		
	株式会社埋蔵文化財サポートシステム				
	現場代理人	雨田 輝之	野口 岩雄		
	調査員	大坪 芳典			
	扇精光株式会社	調査員	井立 尚	織田 健吾	

調査期間および調査面積

範囲確認調査 平成23年7月4日～9月8日 257㎡

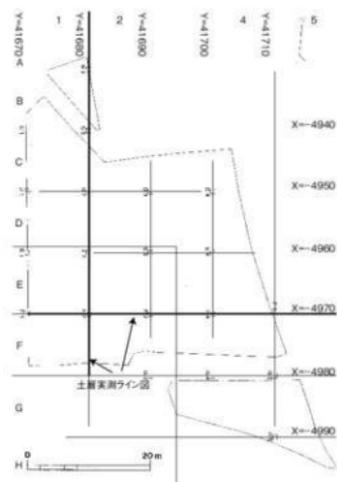
本調査 平成23年11月7日～平成24年3月2日 1,839㎡

報告書担当 新幹線文化財調査事務所 文化財保護主事 浦田 和彦  
文化財調査員 堀内 和宏 東郷 一子

## 3 調査の方法

調査は、国土座標に合わせて10m×10m四方のグリッドを設定し、北からA・B・C・・・、西から1・2・3・・・の番号を付し（第5図）、表土は重機で、それより下層は扇状地礫層まで人力で掘り下げ実施した。

出土遺物は、遺構に伴うものは遺構とともに記録して、それ以外のものはグリッドごとの層ごとに取り上げた。



第5図 グリッド配置図（1/800）



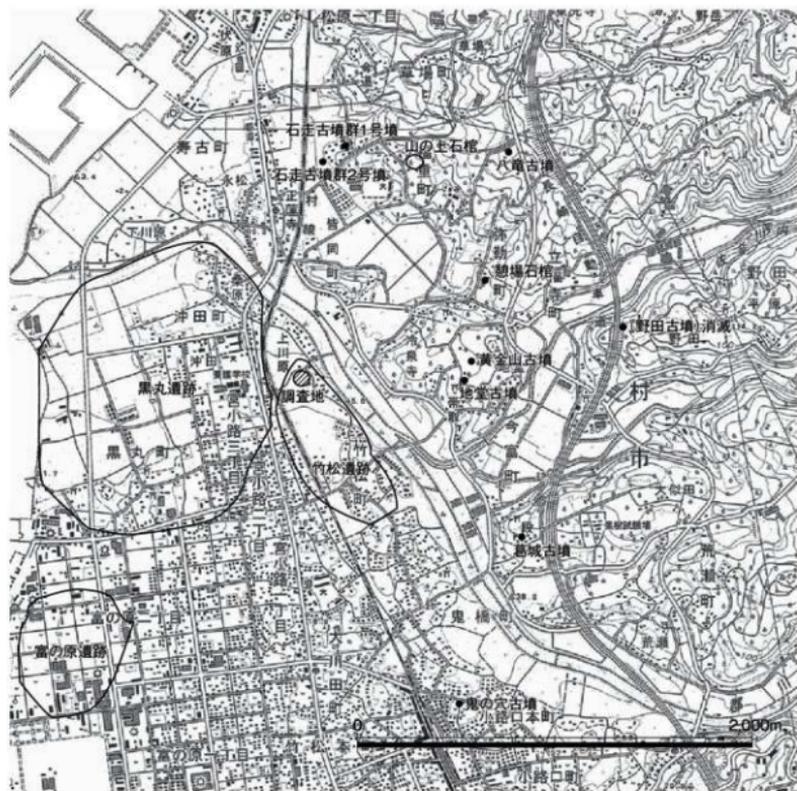
第6図 竹松遺跡調査区周辺地図 (1/2,500)

## II 地理的・歴史的環境

### 1 地理的環境

大村市は県本土部の中央に位置し、西に大村湾、東に多良山系と接する。市内には多良山系を源として大村湾に注ぐ市内最大の二級河川郡川が流れ、この郡川と大上戸川が運搬した土砂によって東西約2.5km、南北約6kmの広がりを持つ県内最大の河成扇状地である大村扇状地が形成されている。

大村扇状地は矢次橋付近から郡川河口に向けて広がる完新世の新規扇状地と郡川下流部の黒丸・沖田・寿古に発達した三角州からなる。竹松遺跡はこの大村扇状地の扇端付近、郡川が山間部から扇状地に流れ出す谷口から2.5kmほどの場所に位置する（第7図）。標高は、10m～15m前後を測り、東西約450m、南北約650mの範囲を有する。現在周辺は宅地、田畑として利用される。遺跡は縄文時代から中世の包蔵地として周知されており、本調査区はその中央部に位置する。



第7図 竹松遺跡周辺地形および遺跡分布図（1/25,000）

## 2 歴史的環境

大村市域には縄文時代から近世に至るまで多くの遺跡が分布する。竹松遺跡周辺には、縄文時代晩期～弥生時代早期の土器と共に扁平打製石斧や大陸系磨製石斧、石包丁が出土し、初期農耕の存在がうかがわれる黒丸遺跡。弥生時代中期の環濠集落で、石棺墓と甕棺墓の共存、長崎県初の鉄戈の出土が確認された富の原遺跡。古墳時代の遺跡は、郡川の対岸東側の尾根の先端部に北から東にかけて石走古墳群、山の上石棺、八竜古墳、憩場石棺、野田古墳（消滅）、黄金山古墳、地堂古墳、葛城古墳とあり、南の平地には後期に築造された複式構造の横穴式石室を持つ鬼の穴古墳などがある。

また、郡川下流域は「郡」の地名や条里地割の存在から肥前国彼杵郡の郡家比定地のひとつとなっており、国道34号線を挟んで沖田・黒丸条里跡と隣接する。（第7図）

## Ⅲ 層序

### 1 土層

1層は表土、耕作土。2層は明黄褐色土で中世の遺物包含層。3層はにぶい黄褐色土で古代末から中世初頭の遺物包含層。4層は暗赤褐色土で古代末から中世初頭の遺物包含層。5 a層は暗赤灰色土で古代の遺物包含層。5 b層は黒褐色土で古墳時代から古代の遺物包含層。5 c層は黒褐色土で古墳時代の遺物包含層。5 d層はにぶい黄褐色土で縄文時代晩期から弥生時代の遺物包含層。6層は黄褐色土で地山である。遺物包含層である2層から5 d層の堆積は最も厚いE 2区で1.3m、薄いB 1区は0.2mで大掛かりな削平を受けたと考えられる。

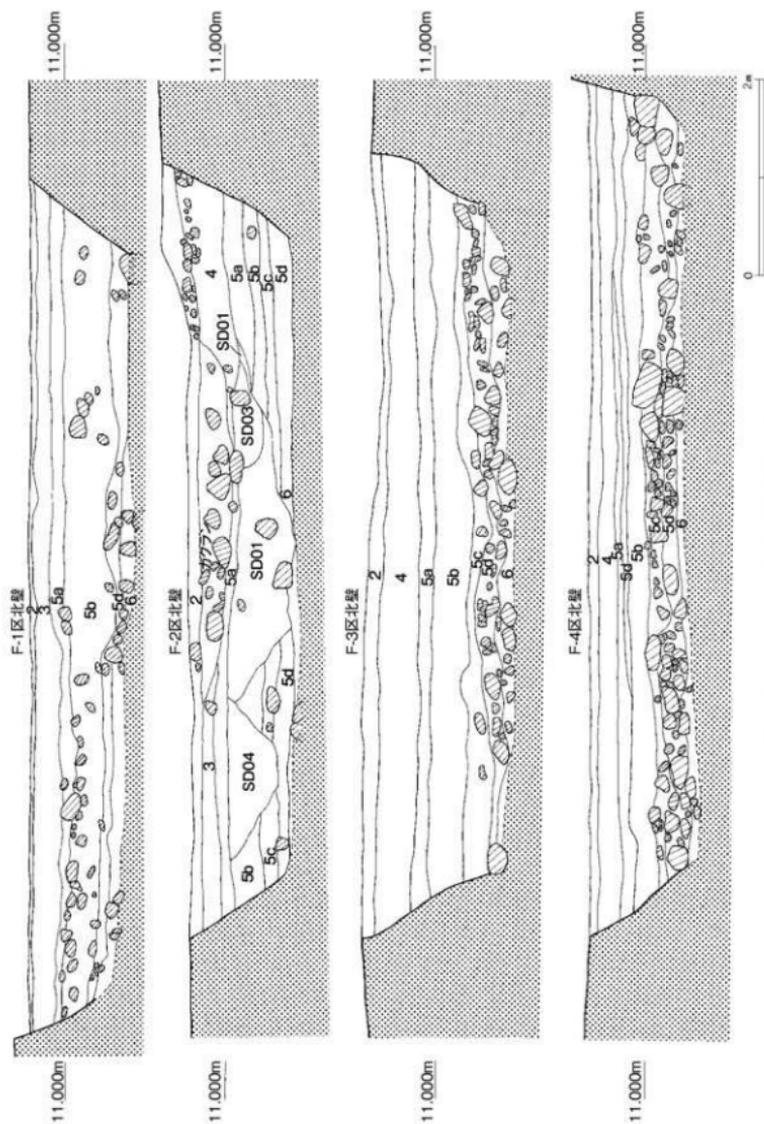
### 2 基本層序

本調査の平成23年度から現在、平成28年度の竹松遺跡の継続的な調査により広大な竹松遺跡の基本層序が確認できた。大きく北部と南部で変化する（第2図、表1参照）。北部の土層はI層が耕作土・表土。II a層が床土で鉄やマンガンの集積層がある明黄褐色土。II b層は鉄やマンガンの集積が見られる中世の包含層である。III層は暗褐色粘質土で古代から古墳時代の包含層。IV層は火山性の黄褐色砂質土で弥生時代から縄文時代の包含層。V層は1万年以上前に形成されたと考えられる乳黄褐色土で非常に硬い古土層、無遺物層。VI層は扇状地礫層である。南部はI層、II a層は北部と同様である。II b層は存在しない。III層は黒ボク土で火山灰を含む河川の作用で形成された腐植土層である。IV層、V層、VI層は北部と同様である。V層の古土層とVI層の扇状地礫層の間に南西部を中心に赤褐色砂質土が堆積している。竹松遺跡は郡川によって形成された扇状地にあり太古から近代に至るまで繰り返されてきた郡川の氾濫により、旧河川跡をはじめ多くの河川によってつくられた部分的な土層の堆積が各場所で見られる。

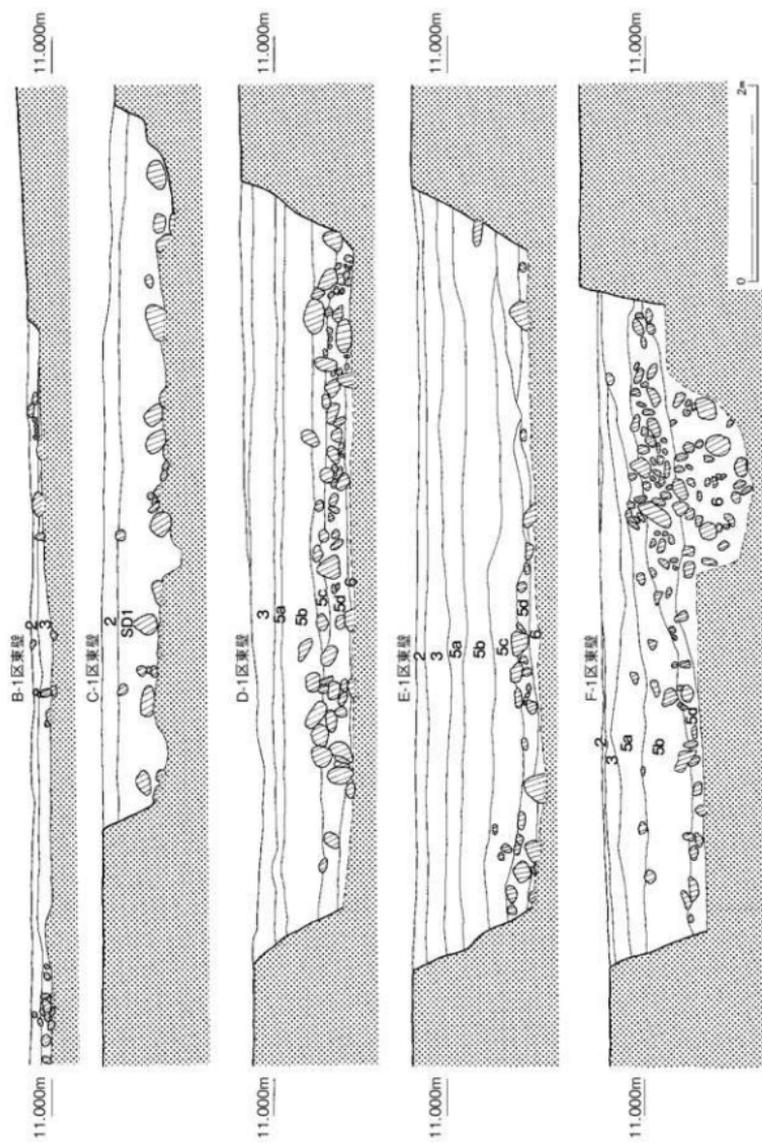
今回の調査区は遺跡の南側の堆積層の北端にあたり、土層は1層、2層は南部の基本層序I層、II a層に相当する、3層、4層、5 a層がこの調査区にのみ堆積する。5 b層・5 c層が基本層序のIII層、5 d層が基本層序のIV層となる。

表1 竹松遺跡土層対応表（南部）

竹松遺跡基本層序（南部）		TAK201108土層	
I層	耕作土・表土	1層	耕作土・表土
II a層	床土・明黄褐色土 鉄・マンガン集積層	2層	明黄褐色土（10YR 6/6）
		3層	にぶい黄褐色土（10YR 5/3）
		4層	暗赤褐色土（2.5YR 3/1）
		5 a層	暗赤灰色土（2.5YR 3/1）
		5 b層	黒褐色土（5 YR 3/2）
III層	黒ボク土・腐植土層	5 c層	黒褐色土（7.5YR 3/2）
		5 d層	にぶい黄褐色土（10YR 4/3）
IV層	黄褐色砂質土層		
V層	古土層		
VI層	扇状地礫層	6層	黄褐色土・地山（10YR 5/6）



第8图 F-1~4区北壁土层图 (1/50)



第9図 B-1区~F-1区東壁土層図 (1/50)

## IV 遺構と遺物

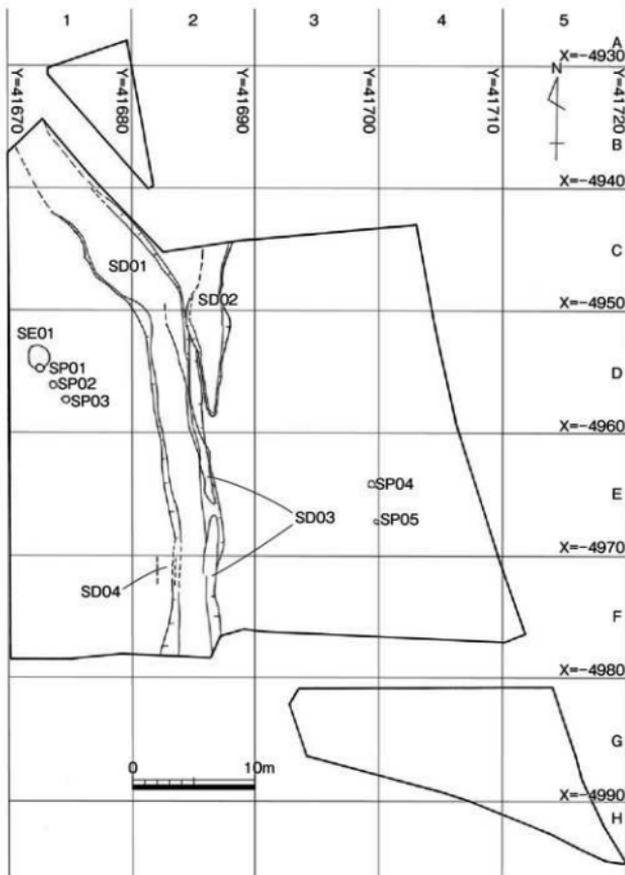
遺構は、5b層(Ⅲ層)から溝状の遺構が4本と6層(VI層)からピットが5基と井戸が1基検出されている。ピットはどれも10cmほどと浅く、大きさもまちまちなので柱穴等の遺構とは考えにくく、ここでは配置図のみの掲載とした。

### 1 溝状遺構

調査区F-2区から北に向かって4本の溝状遺構が5b層(Ⅲ層)から検出された(SD01~04)。SD01はC-2区から北西に曲がる。埋土は5b層(Ⅲ層)と同じ黒褐色土である。底は6層(VI層)まで入る。その形状から、人為的なものとは断言できない。大村扇状地に幾度も流れた、郡川からの

氾濫の跡の可能性が高い。遺物は須恵器、石鏃が出土していることから、古代の氾濫の跡と考えられる。

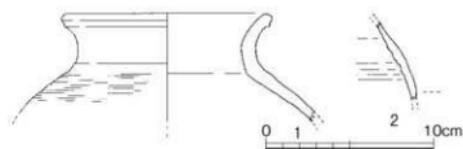
**土器** 1は須恵器甕の口縁から肩部にかけての破片である。2は須恵器壺の胴部片である。朝鮮系無釉陶器の可能性もある。



第10図 遺構配置図 (1/400)



写真1 SD01 (東から)



第11図 SD01出土土器実測図 (1/3)

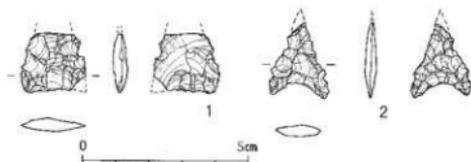


写真2 SD01出土土器

表2 SD01出土土器観察表

図版番号	器種	部位	出土遺構	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	須恵器甕	口縁部一層部	SD1	12.8	—	—	回転ナデ→ハケ目	回転ナデ→ハケ目	灰色	灰色	良好	精良	
2	須恵器甕	胴部	SD1	—	—	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ・櫛目比喩	灰色	黄灰色	良好	白色粒子・黒色粒	朝鮮産無釉陶器か

石器 1・2とも黒曜石裂石鏃である。1は平基の石鏃の基部片である。2は円基の石鏃の基部から脚部片である。



第12図 SD01・02出土土器実測図 (2/3)



写真3 SD01・02出土土器

表3 SD01・02出土土器観察表

図版番号	器種	出土地区	石種	色調	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g) 完形のみ	形状、その他
1	石鏃	SD01	黒曜石	漆黒	18.0	20.0	4.0	—	平基の基部のみ残存
2	石鏃	SD02	黒曜石	漆黒	23.0	1.9	1.8	—	円基で基部から片脚残存

## 2 井戸 (SE01)

6層 (VI層) 上面から、扇状地礫層を掘り込む井戸が検出されている。規模は上端の径が約180cm、下端、底の径が約80cm、深さ約200cmである。埋土は水分を多く含む黒色粘質土で極めてしまりが強く、井戸を廃棄したときに投げ込まれたと考えられる礫も多く含む。遺物は古代の土師器が出土していることから、古代の井戸と考えられ、井戸の上部はⅢ層形成時に消失したものと思われる。

土器 1は土師器の甕である。口縁部内側に横方向に、外面に縦方向に刷毛目状の粗い調整痕がある。内面には非常に粗い縦方向の削りの痕が残る。2は器径が19.2cmある大型の土師器の蓋である。8世紀前半のものと考えられる。3は内黒の土師器碗である。8世紀末から9世紀にかけてのものと考えられる。

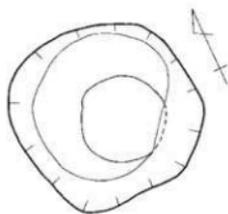
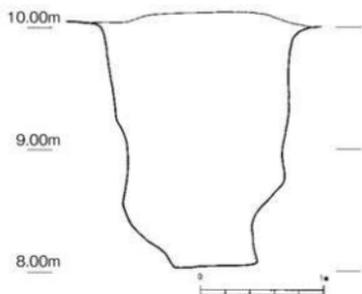
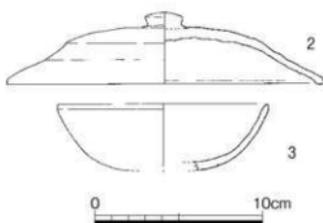
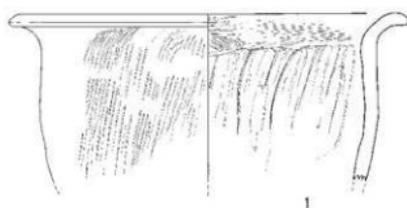


写真4 SE01 (西から)



第13図 SE01実測図 (1/40)



第14図 SE01出土土器実測図 (1/3)



写真5 SE01出土土器

表4 SE01出土土器観察表

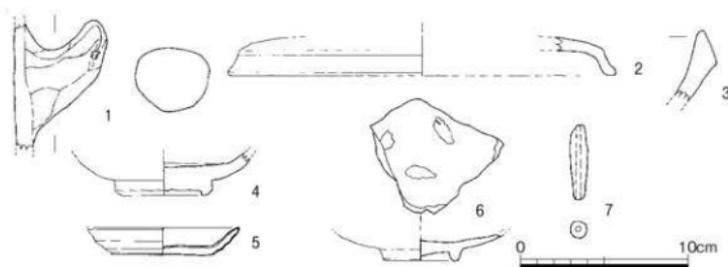
図録番号	器種	部位	出土遺構	法量 (cm)		調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	内面	外面	内面	外面			
1	土師器葉	口縁から肩部	SE01	24.1(復元値)	-	ケズリ	ケズリ	にぶい黄褐色	明黄褐色	良好	角閃石、石英を含む	
2	杯蓋	つまみから口縁	SE01	-	44	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良好	長石、わずかに2mm大の赤色粒子を含む	半断面をV断面よりから8世紀程度に相当するものか、つまみの形状はボギン状で中央がややふくらむ。土師器の内面。
3	埴	口縁から底部	SE01	12.8(復元値)	-	ナデ→ミガキ	ナデ	黒色	明黄褐色	良好	角閃石、石英を含む	

## V 遺物

### 1 II a 層の遺物

#### (1) 土器

1は瓶の把手である。ナデ調整をほどこされている。古墳時代のものと思われる。2は須恵器甕の蓋である。3～5は中世の遺物と思われる。3は東播系須恵器のこね鉢の口縁である。4、5は貿易陶磁である。4は龍泉窯系の青磁碗である。釉色は濃い青緑色で高台は削りだされ外面の底部際に2条の圈線がみられる。畳付際は釉がかかっているが高台内は無釉である。5は白磁皿である。口縁は口禿で、全体に小型で浅く平底である。全面に施釉されているが底部はヘラ切り離しのためか一部掻き落とされている。大宰府編年Ⅸ類に相当する。6は陶器皿である。見込みに3つの砂目痕があり兜巾高台である。釉はうすく薬灰釉が見込みに見られ体部下半から高台は無釉で体部下半に1条の圈線がみられる。底部のみの残存なので体部上半に釉がかけられているようであるが景色となっているか不明である。産地は不明である。近世初頭のものと思われる。7は土師質の筒形状の土錘である。10g未満の小型で側辺が直線的で、穿孔はほぼまっすぐにとおている。



第15図 II a層出土土器実測図 (1/3)

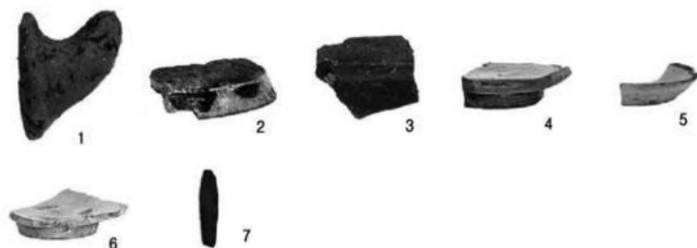


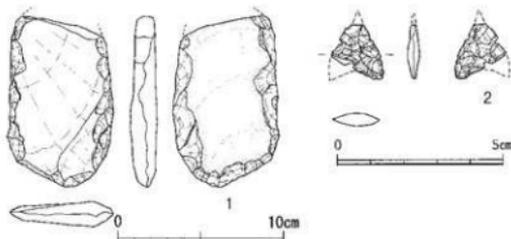
写真6 II a層出土土器

表5 II a層出土土器観察表

図版番号	器種	部位	出土層位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	土師器瓶	把手	2				ナデ	ナデ	橙色	橙色	良好	まばらに砂粒を含む	古墳時代
2	須恵器罍	2			2.3				灰オリーブ	灰オリーブ	良好	微細な黒粒砂子を含む	
3	須恵器こね鉢	口縁	2						灰オリーブ	灰オリーブ	良好	粗く大き目の白粒を含む	東播磨系
4	青磁碗	底部	2	-	2.6	5.9	-	-	濃い緑色	濃い青緑色	良好	薄赤茶色で緻密	龍泉窯系
5	白磁皿	底部	2	9.2	1.7	6	-	-	薄い青色	薄い青色	良好	灰白色で微細な黒色砂子を含む	近畿に相当
6	陶器皿	底部	2	-	-	4.6	-	-	薄黄色	薄黄色	良好	薄黄色でわずかに白粒を含む緻密	近世初頭か
7	土鉢	ほぼ完形	2				ナデ	ナデ	赤茶色	赤茶色	良好	赤茶色で長石混じる	簡型

## (2) 石器

1は扁平な安山岩製の短冊型打製石斧である。刃部の形状は両刃である。両側縁を平行に整形する。権現脇B類に相当する。2は光沢のない漆黒色の黒曜石製石鏃である。形は円基である。



第16図 II a層出土石器実測図 (1は1/3、2は2/3)

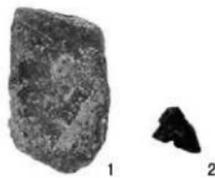


写真7 II a層出土石器

表6 II a層出土土器観察表

図版番号	器種	出土地区	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	打製石斧	G-3	安山岩	104	64.5	16	125	扁平
2	石鏃	F-1	黒曜石	13	16	4	0.72	

## (3) ガラス玉

1・2はガラス玉である。1はE3区の2層から出土し、透明感のない青緑色で表面は風化により乳白色になる部分もある。形は整っている。巻き付け技法でつくられたと見られる。2は表探で、透明な青緑色を呈し、微細な気泡をまばらに含む。引き伸ばし技法によるものと思われる。エネルギー分散型蛍光X線分析の結果1は鉛ガラス製、2はカリガラス製である。

古代日本では弥生時代の前期末から中期初頭にかけての北部九州からガラス製品の使用が始まる。古墳時代後期までは輸入品の再利用であり、7世紀になるとガラス素材の輸入もある。7世紀後半からは国産の鉛ガラスが生産されるようになる。その材質を見ると初期は鉛ガラス、鉛バリウムガラス、カリガラスであるが、弥生時代後期からは高アルミナソーダ石灰ガラスなど多様化する。1は材質、製作技法をから中国系であれば弥生時代前期から後期、国産であれば古墳時代後期のものと考えられる。しかし、古墳時代後期からのものは径が8mm以上の大型のものが多いことから弥生時代のものである可能性が高い。2は材質、製作技法からインド・東南アジア系のもので弥生時代前期から、

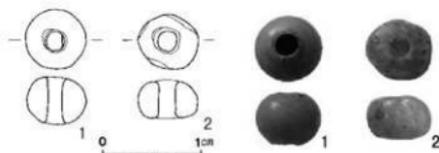
古墳時代後期に国産のものがつくられるまで存在するが、他の出土遺物の状況から弥生時代中期から後期のもの可能性が高い。

参考文献

「古代ガラスと考古科学」『月刊文化財』

平成22年11月号 文化庁文化財部監

修



第17図 I a層出土ガラス玉実測図(2/1) 写真8 II a層出土ガラス玉

## 2 3・4・5a層の遺物

### (1) 土器

#### ① 3層の土器

1は弥生土器の甕の口縁部である。内面にハケ目がみられる。口縁端部が欠損しており、表面が摩滅している。弥生中期のものと思われる。2は須恵器の甕の口縁部であり、頸部に波状文をめぐらせる大型品である。時期は7世紀初頭と考えられる。

3は須恵器の短頸壺の口頸部である。口縁が一部下がり、下がった部分の外側の一部がコブ状にふくれる特徴を持つ。蓋を伴うかは不明である。中村浩氏の須恵器の編年におけるII型式のものか。4～6は須恵器の坏蓋である。4は器高が高くかえりがないもので古墳時代後期の坏蓋である。天井部に沈線がみられ、内面に気泡の跡が点在する。5は天井部が未調整である。6は天井部がドーム状に盛り上がり、かえりの突出が大きいもので、大宰府分類小坏蓋である。7は須恵器の坏である。粘土痕があり、口縁部が直立するように伸びる。須恵器坏蓋の器高が高くかえりがないものに似る。8は須恵器壺底部である。底部の一部に粘土質状の付着物あり。底部は平らで、垂直に立ち上がっていく。中村編年IV型式の頃か。

9は土師器の甕の口縁部である。磨耗が激しい。頸部の内側に指頭圧痕を残す。古墳時代のものである。10～13は中世の遺物である。10は瓦質土器の高坏脚部である。外面はロクロ回転のち斜め方向にハケ調整後ナデ施す。内面は裾部に向かってナデを施す。

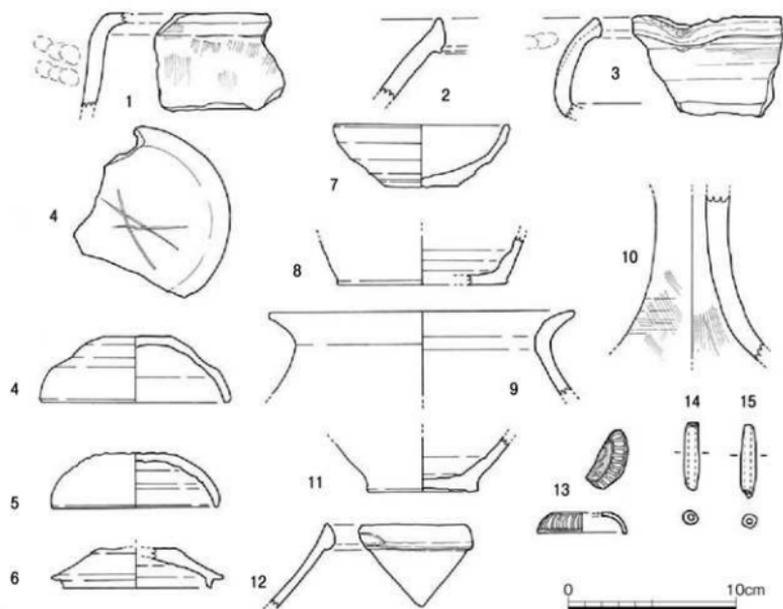
11は白磁の底部である。外面は露胎、内面は施釉と分かれているが、境界は不明である。底部にヘラ切り離しが見られる。12は白磁の口縁片である。全体に施釉されている。大宰府編年XVにおけるIV類か。13は青白磁の合子の蓋である。天井部の一部が欠損しているが、外面と天井の内側に施釉されている。天井部は反転復元すると3.6cm程度になる。

14、15は土錘である。管状土錘であり、側辺が直線的である。14は胎土には細かい長石を含む。15は胎土には長石、雲母を含む。いずれも中世期である。

表7 3層出土土器観察表

採取番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	器径	外面	内面	外面	内面			
1	弥生、甕	口縁部				ナデ	ハケ目	にぶい黄褐色	灰黄褐色	やや良好	やや精緻、長石、雲母	口縁端部欠損、表面摩滅
2	須恵器、甕	口縁部				回転ナデ	回転ナデ	灰	灰オリーブ	良好	精緻、白色粒子	7世紀初頭
3	須恵器、短頸壺	口頸部	16.6			回転ナデ	ナデ	灰白	灰白	やや良好	やや精緻、長石、角閃石	口縁が下がる

4	須恵器、坏蓋	1/2	11.6			回転ナデ	ナデ	灰	灰白	良好	精緻、長石、角四石	内面に気泡の跡が点在
5	須恵器、坏蓋	2/3	10.2	(3.3)		回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	良好	精緻、長石、石英、角四石	天井部は未調整
6	須恵器、坏蓋	1/4	4.6	(2.4)		回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	やや良好	やや精緻、長石、角四石	
7	須恵器、坏	口縁部-底部	10.6	(3.8)	(4.5)	回転ナデ/ヘラ切り	回転ナデ	灰	灰	良好	精緻、長石、角四石	粘土痕あり
8	須恵器、壺	底部		(3.1)		ナデ	回転ナデ	灰白	灰	良好	精緻、雲母、角四石	底径10.3cm、底部の一部の粘土質状の付着物あり
9	土師器、甕	口縁部	18.4	(5.2)		ハケ目/ナデ	ハケ目/ナデ	橙	橙	やや良好	やや粗雑、長石、石英、長四石	磨耗著しい
10	瓦質土器、高坏	脚部				ハケ目/回転ナデ	ハケ目/ナデ	黄灰	黄灰	良好	やや精緻、金雲母、雲母	斜め方向にハケ目をナデる
11	白磁、碗	底部		(3.3)		露胎	施釉	灰白	灰白	良好	精緻	底径6cm
12	白磁、玉縁	蓋	17			施釉	-	灰白	灰白	良好	精緻	
13	合子、蓋	1/3		(1.25)		施釉	施釉 露胎	明赤-7灰	灰白	良好	精緻	天井部3.6cm
14	土師	ほぼ完形				-	-	橙		良好	精緻	長さ4.6cm、幅9mm
15	土師	ほぼ完形				-	-	明赤褐		良好	精緻	長さ4.5cm、幅9mm



第18図 3層出土土器実測図(1/3)

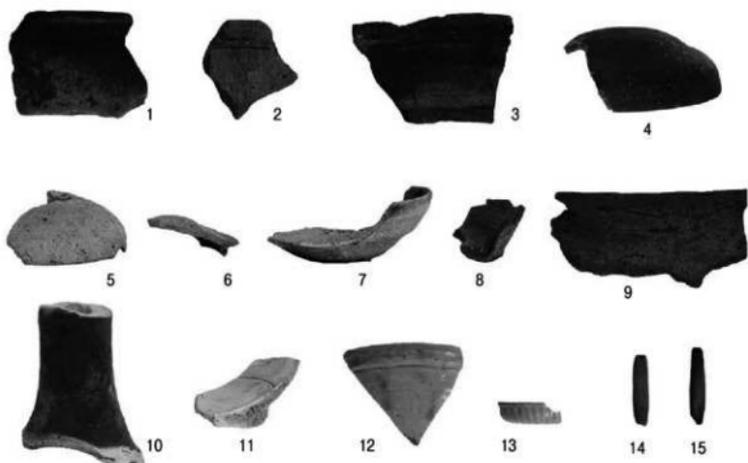
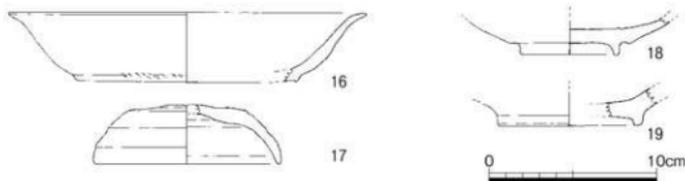


写真9 3層出土土器

②4層の土器

16は土師器の高坏である。外面をハケメ、内面をナデによる調整が見られる。長石を含み、全体的に磨耗している。17は須恵器の坏蓋である。外面を、やや沈線状のケズリを経て回転ヘラナデで調整されており、内面へも続いていく。全体に器厚があり厚ぼったい。天井部のケズリがやや不足。天井部と体部の境がなく、丸くなった形状と量から牛頭編年ⅣA期6世紀末の製品と考えられる。18は須恵器の皿である。全体にユビオサエナデの調整が見られ、高台部には貼り付け後、ナデが見られる。また、雲母を含む。19は貿易陶磁の高台付碗である。時代は古代後期で越磁Ⅰ類と見られる。砂目積跡あり、外面がやや摩滅し素地が現れている。釉薬は全体に薄い。



第19図 4層出土土器実測図(1/3)



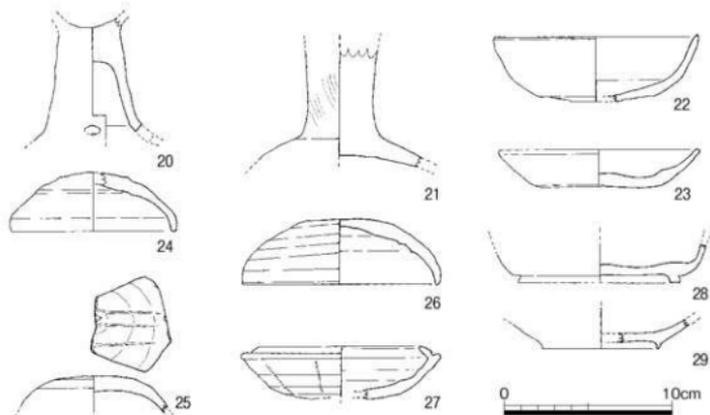
写真10 4層出土土器

表8 4層出土土器観察表

採取番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	粘土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
16	土師器	高坏	口縁~底部	21.6	4.2		ナデ	ハケメ	にぶい橙	浅黄橙	良好	長石	全体的に磨耗している
17	須恵器	坏蓋	天井~口縁部		5.6	11.4	回転ヘラナデ	やや沈澱状のケスリ~回転ヘラナデ	灰色	灰色	精良	白色粒子著	平塚編年表I期6世紀末
18	須恵器	皿	底部			(底径)5.8	全体にニブイオサエ~ナデ高台部に磨り付け後ナデ		灰白		良好	雲母	
19	須恵陶器	高台付碗	底部			(底径)8.8			オリーブ黒色	灰色~オリーブ灰色	精良		越前I期六代末期

## ③ 5a層の土器

20、21は弥生土器の高坏脚部である。弥生時代後期のものである。どちらも上部を欠損している。22は土師器の碗底部から口縁部である。回転糸切り底である。口縁部はとがり気味である。23は土師器の皿底部から口縁部である。底部にはヘラ切り離しが見られ、口縁部は22に似る。22、23は中世のものである。24、25、26は須恵器の坏蓋である。24、25は器高が高くかえりがないもので、外面、内面ともにクロク目が残る回転ナデが施されている。25は天井部にヘラ線刻を有する。前者後者ともに古墳時代後期のものと思われる。26は外面に左回転ヘラ削り、内面に左回転ナデの調整を施す。右回転クロク成形を成す。中村浩氏の編年によるII型式5段階のものか。27は須恵器の坏身である。口縁部に受け部をもつもので古墳時代後期のものである。28は須恵器の坏底部である。底部に高台をもち、高台が低く断面系が正方形で高台端部が外傾するものである。29は瓦器の碗底部である。高台を有する。中世のものである。



第20図 5a層出土土器実測図(1/3)

表9 5a層出土土器観察表

採取番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	粘土	備考	
			口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面				
20	弥生・高坏	脚部				ナデ		褐色	にぶい黄橙	良好	やや精緻、細砂粒、白色粒		
21	弥生・高坏	脚部				ナデ~ヘラ削り		橙	明黄	良好	やや精緻、石膏、角閃石		
22	土師器・碗	底部~口縁部	12.2	(3.9)		磨オサエ~ナデ	磨オサエ~ナデ	浅黄橙		良好	精良	雲母	底部に回転糸切り
23	土師器・皿	底部~口縁部	6.8	(2.2)		ヘラ削り	ナデ	にぶい黄橙	やや良好	良好	精良	長石、雲母	全体的に磨耗している
24	須恵器・坏蓋	1/3				(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	良好	精良	白色粒子(石膏)

25	環忠器、環蓋	四隅欠け		(4)		回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	精緻、石英、雲母	若干軟質
26	環忠器、環蓋	1/4				回転ナデ/ ヘラ型直	回転ナデ	にぶい黄褐色	灰	不良	やや粗雑、乳白色、大粒の石英	
27	環忠器、環身	口縁部	9.7			回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	良好	精緻、乳白色、石英	残存率50%
28	環忠器、環	底部				ナデ	ナデ	灰白	灰	良好	長石	高台残り
29	瓦質土器、甕	底部				ハケ目ナデ	ナデ	灰白	灰	良好	精緻、灰白色、磁器	ローリング強

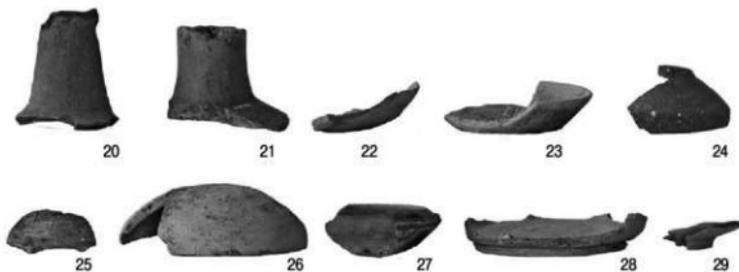


写真11 5a層出土土器

## (2) 石器

1、2は安山岩質の扁平打製石斧の基部である。また1は短冊形、2はバチ形の形状と見られる。3は完形のスクレイパーであり、材質は黒曜石である。4、5は黒曜石の石鏃である。4は脚部が凹基と確認できるが、5の脚部は欠損しており形状は不明である。6、7は黒曜石の石鏃であり、部位は共に凹基の脚部と見られる。8、9は滑石製の石鍋であり、部位は共に縦耳と見られる。殊に8の縦耳は小型であり、また内外面にススを確認できる。10は滑石製のバレン状石製品であり、補修具としての用途があったと見られる。

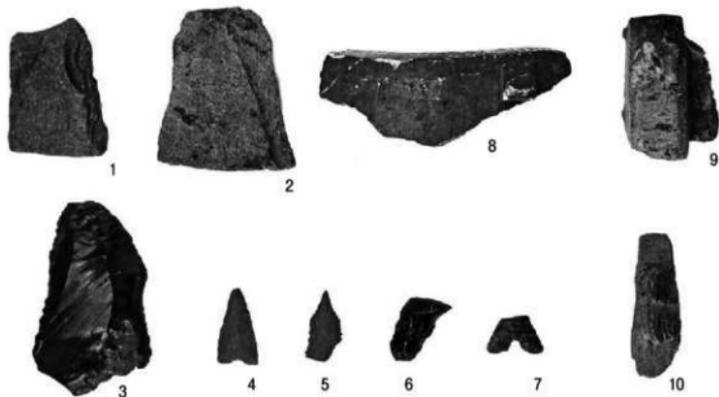
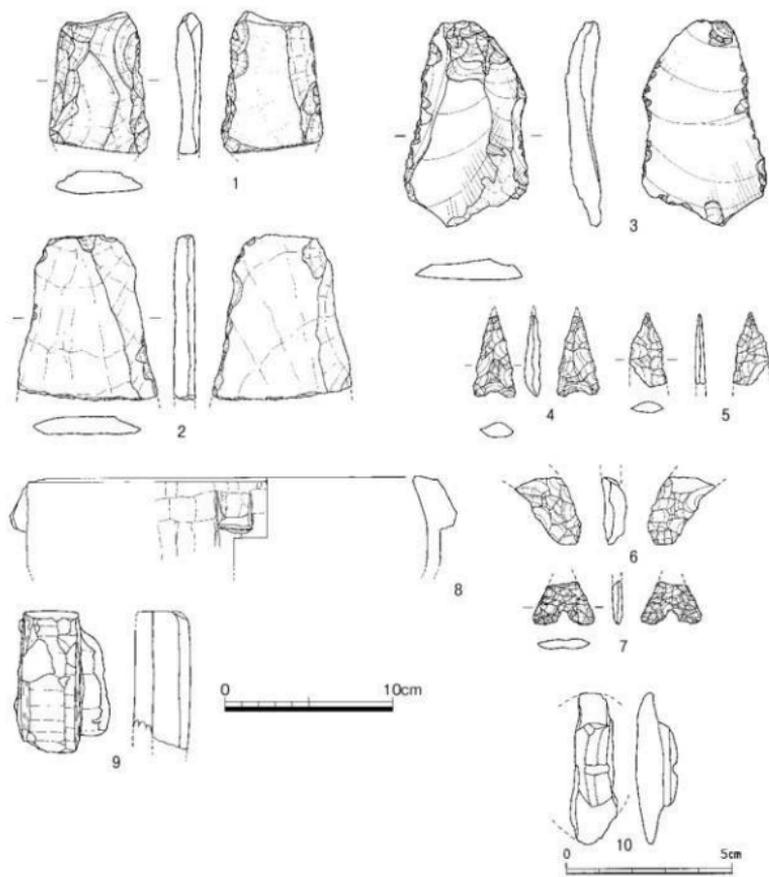


写真12 3・4・5a層出土石器



第21図 3・4・5a層出土石器実測図(1・2・8・9 1/3、3~7・10 2/3)

表10 3・4・5a層出土石器観察表

図版番号	器種	部位	出土層位	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	扁平打製石斧	基部	4層	安山岩	(8.6)	6.1	1.5	(105)	短冊形
2	扁平打製石斧	基部	4層	安山岩	(10.1)	8.4	1.5	(135)	バチ型
3	スクレイパー		3層	黒曜石	6.3	3.8	1.05	15	
4	石鎌		5a層	黒曜石	(2.5)	(1.3)	0.45	(0.1)	凹基 先端部欠損
5	石鎌		5a層	黒曜石	(2.2)	(1.0)	0.3	(0.1)	凹足欠損
6	石鎌	脚部	3層	黒曜石	(2.1)	(2.05)	0.9	(5)	凹基
7	石鎌	脚部	4層	黒曜石	(1.35)	1.9	0.3	(0.1)	凹基
8	石鎌	縦耳	5a層	滑石	(内径22.0)			(170)	小型の縦耳 内外面にスス
9	石鎌	縦耳	3層	滑石	(8.6)	(5.8)	4.2	(250)	
10	バレン状石製品		3層	滑石	(4.7)	(1.4)	1.5	(15)	補修具

### (3) 緑釉陶器

下図は古代の緑釉陶器皿の高台部片である。F-4区の5a層から出土した。復元高台径6.2cmを測る。外面は草色、内面は緑青色を呈する。高台はやや特徴的なもので、先端部が逆台形を呈し、先端部が鋭角を呈する。他に図示しえない14点の緑釉陶器の細片が出土している。

本資料の産地については、杉原和恵の指摘した貼り付け高台、内面ミガキ、全面施釉、白色系の胎土などの防長産の特徴に合うことから、防長産と判断した。高橋編年のⅢ期に相当し、9世紀末から10世紀初頭に比定される(高橋1993・杉原2003)。同年代の在地の土器型式と器形が酷似するという全国的な緑釉陶器のあり方に反さず、大宰府出土の土器に酷似した器形を呈する。逆台形の高台を持つほぼ同法量の類品は、山陽新幹線新下関駅の建設に伴って調査された下関市秋根遺跡から出土している(下関市教育委員会1977)。長門は尾張と並び、「延喜民部式」下、55年料雑器条で瓷器の貢納国と規定される。

表11に北部九州内(大宰府条坊を除く)の緑釉陶器の出土例一覧を掲げた。緑釉陶器は奈良三彩の技術が9世紀に入って地方に伝えられて各地の生産が開始された平安時代の高級品であり、地方では国府・郡家関連遺跡を示す遺物とされることもある。出土状況が詳細に分かる熊本県堂園遺跡の本蓋土坑墓の副葬事例の報告(木崎1997)では、緑釉陶器は初期越州窯の粗製品よりも頭部に近い位置に置かれ、陶磁器の受容者の肥後国球磨郡地域の郡司層が舶来品よりも珍重していた点が指摘されている。

九州内の緑釉陶器出土地を通覧すれば、(ア)国府・郡家(イ)その関連遺跡(ウ)官道沿い(エ)港湾遺跡にほぼ類型化が可能である。福岡県の内陸部の筑豊地域からも少なからぬ出土例が見られるが、行橋市の草野津から田川市、米ノ山峠、大宰府に至る西海道豊前路の沿線である。佐世保市門前遺跡や博多遺跡など(エ)の事例も見られるが、(ア)～(ウ)に対して勝る状況は見られない。瀬戸内海で重量物の海上輸送が平安時代に制度化されるに至っても、緑釉陶器は地方官衙遺跡などへ、陸上の官道ルートによって運ばれ、その受容層は地方官人層に限られていた状況がうかがえる。

#### 参考文献

山陰中世土器研究会編『緑釉陶器の諸相—山陰地方を中心として—』2002

下関市教育委員会編『秋根遺跡』1977

杉原和恵「防長」

(『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器』古代の土器研究会第7回シンポジウム資料集・2003)

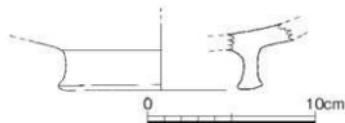
高橋照彦「防長産緑釉陶器の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集・1993

「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集・1995

中島恒次郎「九州」(『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器』同上・2003)

山本信夫「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集・1999

・関係の発掘調査報告書は表11内に掲げた。産地同定などについては、田中学(長崎市文化財課)の助言を得た。



第22図 3層出土緑釉陶器実測図(1/3)



写真13 3層出土緑釉陶器



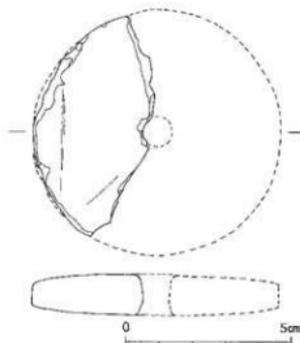






#### (4) 紡錘車

F-4区の5a層から滑石製の紡錘車が出土している。断面は長方形を呈し、片面に細い2本の沈線が彫られている。県内の各遺跡でもたびたび石製紡錘車の出土は見られるが、時代を特定できる遺構からの出土はほとんど見られない。そこで、関東の群馬県の例ではあるが、今回の紡錘車の時代を見る手がかりとして使いたい。群馬県埋蔵文化財調査事業団の資料展示室資料によると、第1段階、弥生時代から古墳時代前期までは土製で断面形が長方形の紡錘車が圧倒的に多く、石製で断面形が長方形のものは使われていない。第2段階、古墳時代中期になると断面形が台形の石製紡錘車が使われるようになり、以降平安時代まで使われる。鉄製の紡錘車は古墳時代後期に一部使用されるが、奈良時代から多くなり、第3段階の平安時代に一気に増加し、10世紀以降石製紡錘車を追い越し、紡錘車の主体となる。今回出土した石製、断面長方形の紡錘車は6世紀から9世紀、古墳時代中期から平安時代前期のものと推測される。また、残存部が3分の1程なので何が刻まれているかわからないが、2本の線刻は所有者の識別のための文字か絵の一部と思われる。



第23図 紡錘車実測図(2/3)



写真14 紡錘車

表12 群馬県内における紡錘車の変貌

(群馬県埋蔵文化財調査事業団資料展示室資料より)

段階	第1段階		第2段階					第3段階			計
	弥生時代		古墳時代					奈良時代			
世紀	2~3		4	5	6	7	8	9	10	11	
断面形	中期	後期	前期	中期	後期前半	後期後半		前期	中期	後期	
三角形		5	1	1							7
長方形					3	1	9	9		1	23
薄台形				24	44	23	88	83	24	1	287
厚台形				8	73	41	51	31	10	4	218

#### 参考文献

東海大学校地内遺跡調査団「回せ！-回転運動から考古資料を考える-」『第17回足もとに眠る歴史展』

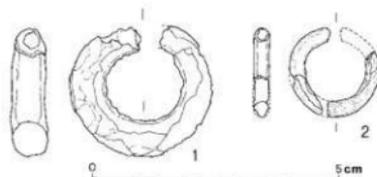
公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 資料展示室資料

#### (5) 耳環

D-2区とC-1区の3層から耳環が1点ずつ出土している。1は外径が2.9cm、断面径が0.75cmを計る。2は外径が1.8cm、断面径が0.35cmを計る。1、2とも断面形は円形である。エネルギー分散型蛍光X線分析の結果、どちらも銀、銅、金、水銀が検出された。このことから銅の芯材に銀板を巻いて、その上から金アマルガム法により鍍金された銅芯銀板貼鍍金製の耳環であると考えられる。

耳環も含めた耳飾りの流れを見ていくと、縄文時代前期の石製の塊状耳飾りに始まる。中国玉器の珠から名付けられている。シャーマン的な女性が身に付けていたと考えられている。縄文時代中期になると円盤型・リング型をした耳栓と呼ばれる土製耳飾りが使用されるようになる。縄文時代晩期終末になると耳飾りをつける儀礼・習俗がなくなる。このあと弥生時代から古墳時代前期までは耳飾りは見られない。これについては縄文人と弥生人の形質の違い、縄文人は耳たぶが大きく、弥生人は狭く小さいので耳栓をつけにくかったのではという意見もある。古墳時代中期になると朝鮮半島との交流が活発化し、カマド付の竪穴住居がつけられたり、新羅を中心とした朝鮮半島からの金属製品の流入が始まる。そのようななか古墳時代後期になると耳環が普及していく。耳環は縄文時代の耳飾りと違い、男女問わず身に付けていたものと考えられる。このことは、当時の人物埴輪から見て取れる。7世紀後半、古墳時代終末期から律令制による唐の服装習俗の導入により耳環はなくなっていく。

古墳時代の耳環の構造は芯を持つもの（中実）、芯を持たない管状のもの（中空）、無垢のもの（3タイプに分かれる。製作技法は無垢環、銅芯薄板貼（金や銀板）、銅芯銀板貼鍍金、鉄芯錫板貼、中空錫板貼、中空銅地鍍金（金銅環）、中空銅地板貼（金や銀板）、中空板作り（金や銀の無垢板）など多岐にわたる。断面形状は正円、蒲鉾型、縦長楕円に分類できる。古墳時代後期の耳環の形状の変化を見ると外径は大きいものから小さいものへ、太さは太いものから細いものへ、断面形は丸から楕円へ、開口部端面形状は平坦から丸みがあるものへと変化する。今回出土した2点は外径はやや大きいものと小さいものであるが、断面形がどちらも正円に近いことから、古墳時代後期前葉のものではないかと考えられる。



第24図 3層出土耳環実測図（1/1）



写真15 3層出土耳環

表13 3層出土耳環観察表

図版番号	出土区	出土層位	外径(cm)	断面径(cm)	断面形	材質	製法
1	D-2区	3層	2.9	0.75	正円	銅・銀・金（水銀）	銅芯銀板貼鍍金
2	C-1区	3層	1.8	0.35	正円	銅・銀・金（水銀）	銅芯銀板貼鍍金

#### 参考文献

- 上田薫「古墳時代の耳飾り」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要』2006  
 渡辺智恵美「自然科学的手法を用いた古墳時代の金属器製作技術の調査と工具の復元」  
 『科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書』2012  
 村上隆「古墳時代の金・銀製耳環の材質と製作技法をめぐる考察」『奈良文化財研究所紀要2002』

## (6) 鉄鍬

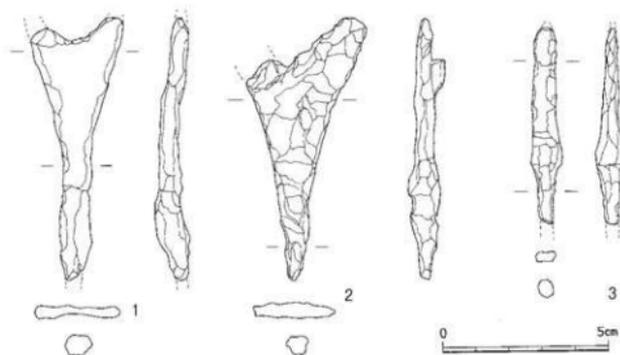
1は雁股の鉄鍬で残存全長8cm、残存幅2.5cmを測る。全体にさびが付着し先端、基部を欠損している。

2は雁股の鉄鍬で残存全長8cm、残存幅2.9cmを測る。全体にさびが付着し先端を欠損している。

雁股鉄鍬は2016年度の大村市による竹松遺跡の調査で古代の火葬土坑から1点、福岡県小田部遺跡で5世紀前半の竪穴建物から1点、熊本県最大規模の横穴である湯の口横穴前庭部で2点、石川遺跡で6世紀中ごろの竪穴建物で1点の九州内では合わせて5点の類似品を確認できた。長崎県、熊本県、福岡県の類似例によると今回出土した雁股鉄鍬は5世紀前半から古代のものと推定される。おおよそ鉄鍬は1点のみで1種類の鍬という出土例あまりみられないなかで湯の口横穴群の雁股鉄鍬のみが長頸鍬をともなって出土し石川遺跡、小田部遺跡、竹松遺跡では雁股鉄鍬1種類のみ出土となっている。複数点出土や他の種類の鍬を伴うことが多い長頸鍬群とくらべると雁股鉄鍬は他の種類の鍬を伴わず出土数も少ないことが注目される。

2016年度の大村市による調査の竹松遺跡では火葬灰廃棄土坑から出土したことから雁股鉄鍬は儀礼に関わるものと思われる。熊本でも古墳時代の住居跡や横穴の前庭から出土している。また、雁股鉄鍬は今回の調査で3層と5a層からそれぞれ1点出土している。石棺材や耳環、ガラス玉の出土なども出土しており、付近に埋葬施設があったと考えられる。

3は棒状の鉄鍬である。柳葉式もしくは長頸鍬群であるかとおもわれるが鍬身部欠損により不明である。



第25図 鉄鍬実測図 (2/3)



写真16 鉄鍬

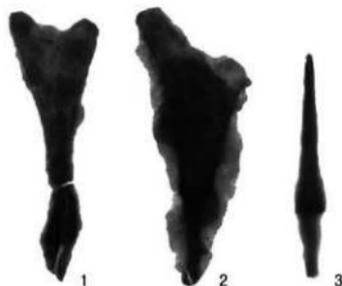


写真17 鉄鍬X線写真

表14 鉄鏡観察表

図版番号	出土区	出土層位	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	重量 (g)	材質	形状
1	E-3区	3層	8.0	2.8	13.2	鉄	腰股
2	E-4区	5a層	8.0	3.7	14.0	鉄	腰股
3	D-1区	3層	6.0	0.9	5.1	鉄	柳葉・長頭?

表15 九州内の腰股鉄鏡類似例

	所在地	出土場所	最大長(残存)	最大幅(残存)	時代	点数	報告書名
1	熊本県山鹿市大字瀬生字湯の口	前庭部第3層	14.8	3.5	6世紀頃	1	『湯の口横穴群(Ⅲ)』山鹿市立博物館調査報告書第10集1990
2	熊本県山鹿市大字瀬生字湯の口	前庭部第3層	14.2	3.1	6世紀頃	1	『湯の口横穴群(Ⅲ)』山鹿市立博物館調査報告書第10集1990
3	熊本県熊本郡植木町大字石川字小道487の1	竪穴建物	5.65	2.65	6世紀中頃	1	『石川遺跡』2000植木町文化財調査報告書第14集
4	福岡市早良区小田部5丁目162	竪穴建物			5世紀前半	1	『有田・小田部第34集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第651集2000
5	長崎県大村市竹松町	DK1			古代	1	『竹松遺跡』大村市文化財調査報告書第41集長崎県大村市教育委員会2016

## 参考文献

- 中原幹彦 西嶋剛広『石川遺跡』植木町文化財調査報告書第14集2000  
 中村幸史郎『湯の口横穴群(Ⅲ)』山鹿市立博物館調査報告書第10集1990  
 山崎龍雄『有田・小田部』第34集福岡市埋蔵文化財調査報告書第651集2000  
 安楽哲史『竹松遺跡』大村市文化財調査報告書第41集2016  
 水野敏典『金属製品の型式学的研究 鉄鏡』『古墳時代の考古学』4巻 同成社2013  
 石野博信『古墳時代の研究1 総論・研究史』雄山閣 1993

## 3 Ⅲ層(5b・5c層)の遺物

## (1) 土器

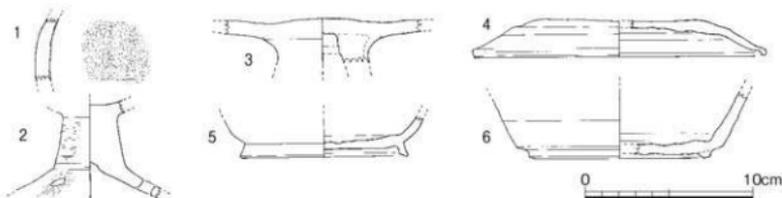
1は弥生時代終末期の肥前型器台の胴部中央片であり、水平方向の櫛書き沈線文を施した2段の文様帯部分のみが遺存する。方形の透かしの存在は少なくとも確認されない。外面では縦方向のハケメ調整の後に横方向の櫛書き文を加えている。上部の櫛書き文は同一工具を使用した5本組2つがまず確認され、上方にやや深く太い櫛書きを少なくとも3本有する。深い沈線を持つ下部の櫛書きは3本のみを残しており、上部上方の3本の櫛書きと同じ工具によって見られる。この器台の年代は、長崎県南島原市今福遺跡における宮崎貴夫の地域編年(宮崎1986)を参照すればⅢ期に当たり、その中でもヘラ書き・区画文のみに文様が統一される以前のⅢ期の古相(宮崎2014)に相当すると考えられる。

2は古墳時代の土師器の高杯である。脚部は短く低く、中実である。杯部の大半と裾部端を欠いているため全体の器形は想定しがたい。小松譲による肥前地域の土師器編年(小松2002)を参照すれば、杯部中位で屈曲し、口縁で外反する特徴をもつ5A期の高杯E類に当たるものと思われる。古墳後期初頭、6世紀初頭に位置付けられる。3は古代の須恵器高杯(高盤)の脚基部である。器径と器高、杯部の立ち上がりの形状はいずれも不明である。脚部と杯部の間は貼り付けによって接合しており、脚部は中空である。杯部は完全に平滑ではなく、中央部に盛り上がりを残している。須恵器高杯(高盤)は古代を通じて窯跡や消費地遺構からは年代別の器形変化を追いにくい器種(牛山編2008)であり、製作年代は定めがたい。

4は古代の須恵器の杯蓋で、つまみの有無とその形状は不明である。平坦部をやや広くとった天井

部外面に斑状の粘土ムラを残している。その器高から8世紀半ば、牛頭編年ⅦA期の新相と見られるが、天井部内面の調整など前代の須恵器の丁寧な調整の特徴を残している。

5と6は高台付の古代の須恵器杯である。5は焼成がやや不良で、高台内などが赤褐色を呈し、体部はやや丸みを帯びている。底径は10.1cmで、高台は鋭利な形状を示し、やや体部との境に寄る。牛頭編年Ⅵ期（7世紀終わり）に位置付けられる。6はきわめて低い台形の高台を有している点と底径、体部の立ち上がり形状などの要素から、牛頭編年ⅦB期（8世紀後半）のものと思われる。



第26図 Ⅲ層出土土器実測図(1/3)



写真18 Ⅲ層出土土器

表16 Ⅲ層出土土器観察表

図版番号	器種	部位	出土地区	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	肥前型器台	胴部 文様帯	E-1区	—	—	—	丁寧な ナデ	縦ハケメ →器描文	明黄褐色	明黄褐色	良好	長石	
2	土師器高杯	脚部	D-4区	—	—	—	ヘラケ ズリ	ヘラケズリ 縦ハケメ	明褐色	明褐色	良好	明黄褐色 の砂粒	穿孔3ヶ所 脚部径 3.3
3	須恵器高盤	脚基部	D-1区	—	—	—	ロクロ	ロクロ	黄灰色	褐色	良好	精良	貼り付け製法
4	須恵器蓋	天井部 - 口縁部	E-3区	17.8	2.2?	17.8	ロクロ	ロクロ	灰色	灰白色	やや良	白色粒子 ・気泡	天井部外面に斑状の 粘土ムラ 1/4強残存
5	須恵器杯	底部	C-3区	—	(2.5)	—	ロクロ	ロクロ	灰黄褐色	灰色 - 赤褐色	やや不良	やや精良	高台付 底径10.1 高 台内がやや焼成不良
6	須恵器杯	底部	E-1区	—	(3.9)	—	ロクロ	ロクロ	灰白色	灰白色	良好	精良	底径11.0

参考文献

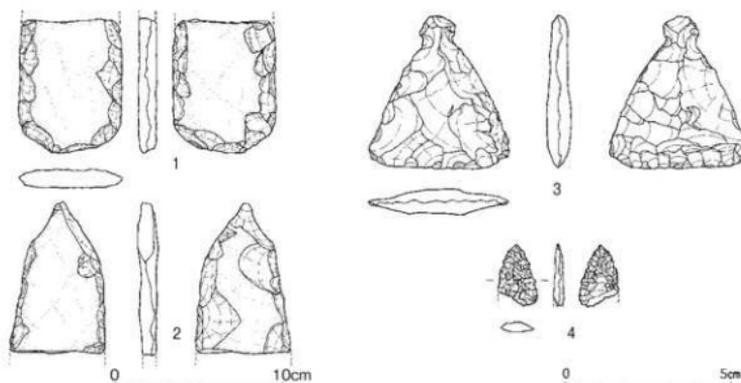
上田龍児「5考察(1)器台型土器について」小田富士雄編『長崎県・景華園遺跡の研究 福岡県  
京都郡における二古墳の調査 佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究  
調査報告第3冊2004

小松譲「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器』第5回  
九州前方後円墳研究会発表要旨資料・2002

宮崎貴夫「第2章総括Ⅱ 弥生土器ならびに古式土師器について」町田利幸・宮崎貴夫編『今福遺

(2) 石器

1・2は安山岩製の打製石斧である。縄文後晩期の土掘具に位置付けられる。1は短冊型で基部を欠損している。2は刃部を欠いているために全体の形状がはかりがたいが、撥型と思われる。3は正三角形形状を呈する小型の石匙である。4は黒曜石製の石鏃で、基部を欠く。



第27図 Ⅲ層出土石器実測図 (1・2 1/3、3・4 2/3)

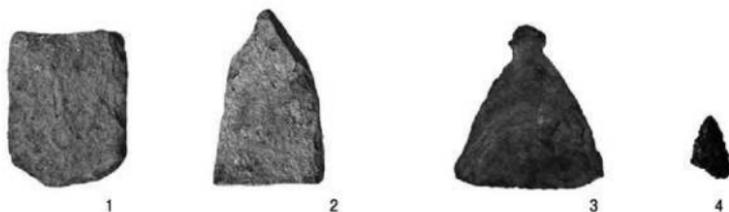


写真19 Ⅲ層出土石器

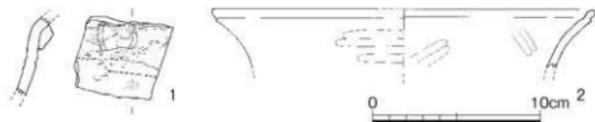
表17 Ⅲ層出土石器観察表

図版番号	器種	出土地区	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	打製石斧	E-1区	安山岩	(82)	6.2	1.1	—	基部欠損
2	打製石斧	E-1区	安山岩	(90)	(57)	7	(80)	刃部欠損
3	石匙	E-3区	サヌカイト	47	43	9	10	
4	石鏃	E-1区	黒曜石	(19)	(12)	0.3	—	基部欠損

## 4 IV層（5d層）の遺物

### (1) 土器

1は縄文土器の深鉢である。部位は体部で内面は条痕ナデ、外面はナデの調整がなされている。胎土に金



第28図 IV層出土土器実測図（1/3）

雲母・長石・石英・角閃石を含む。リボン状突帯をつけており、縄文晩期とみられる。2は縄文土器の浅鉢である。部位は口縁部で内面、外面ともヘラミガキの調整がなされている。胎土に雲母・石英・角閃石を含む。全体にミガキ痕が残っている。縄文晩期とみられる。

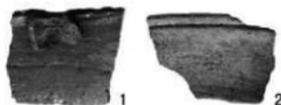


写真20 IV層出土土器

表18 IV層出土土器観察表

図版番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	縄文土器	深鉢	体部				条痕ナデ	ナデ		橙	良	金雲母 長石 石英 角閃石	リボン状突帯縄文晩期
2	縄文土器	浅鉢	口縁部	23	(3.6)		ヘラミガキ			にぶい黄橙	良	石英 角閃石 雲母	縄文晩期

### (2) 石器

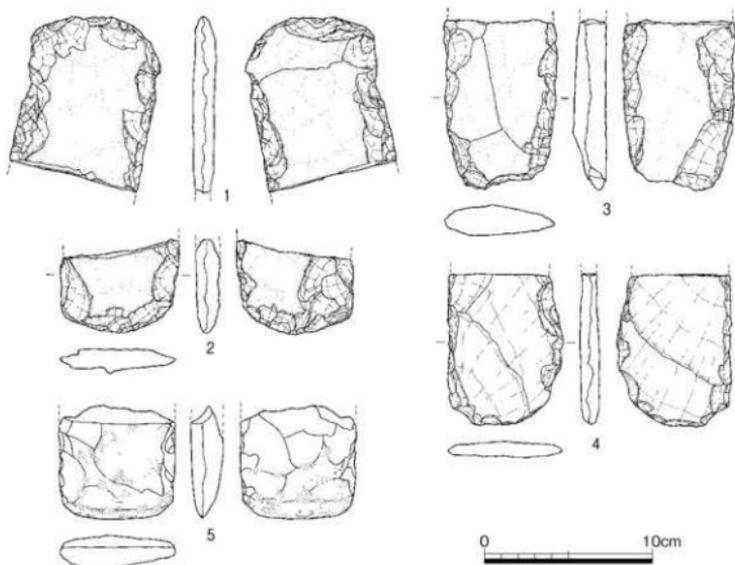
1～4は安山岩質の打製石斧である。形状は短冊形で、1には抉りが両側にみられる。1～4は縄文中～晩期の土掘り具とみなされる打製石斧と考えられる。5は泥岩質の磨製石斧である。形状は短冊形。

表19 IV層出土石器観察表

図版番号	器種	部位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	打製石斧	刃部	安山岩	(10.7)	7.4	1.3	(175)	短冊形
2	打製石斧	刃部	安山岩	(5.7)	7.1	1.5	(70)	短冊形
3	打製石斧	刃部	安山岩	(10.2)	6.85	2.0	(170)	短冊形
4	打製石斧	刃部	安山岩	(9.2)	6.95	1.2	(105)	短冊形
5	磨製石斧	刃部	泥岩	(6.9)	7.0	2.0	(120)	短冊形



写真21 IV層出土石器



第29図 IV層出土石器実測図 (1/3)

## VI まとめ

今回の調査により、土層の堆積状況を見ると3万年前以上に形成されたといわれる大村扇状地の礫層は度重なる郡川からの氾濫により、幾つもの高低のうねりがあることが確認された。その上に河川的作用によって地層が堆積しているが、ここにも細かな氾濫等による部分的な土層の堆積が確認できる。さらに、後世の農地の造成により旧地形が高いところは削平されていることがわかる。

遺構は古代の井戸が検出されているが、その他はない。遺物は縄文時代～中世のものが出土している。土層的に見るとIV層(5d層)が縄文時代から弥生時代の遺物包含層、III層(5b・5c層)が古墳時代から平安時代の遺物包含層と見られる。このことから調査区付近に縄文時代から古代にかけての生活面があると思われる。今後、調査地域が拡大されて行く中で明らかになっていくものと思われる。特筆すべきものとして弥生時代のものと思われるガラス玉2点、古墳時代のものと思われる耳環2点、鉄鏃3点、古代の越州窯系青磁片1点、緑釉陶器片21点(同一個体)が出土した。これらのことから弥生時代中期から古墳時代後期にかけての祭祀・宗教的な遺構が付近にあったことがうかがえる。また、緑釉陶器や越州窯系青磁片が出土したことから、古代これらの物を持ちうる有力者がこの地域にいたものと思われる。

表20 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査履歴

年度	遺跡名	業者名	調査面積 (m <sup>2</sup> )	委託期間	第30回 地図番号
平成22年度	尾和谷城跡 (OWA201005)	柳島田組	720	1/6～3/25	
平成23年度	尾和谷城跡 (OWA201101)	柳イビック	1,594	4/11～6/30	
	竹松遺跡 (路線) (TAK201108)	柳埋蔵文化財サポートシステム・扇精光伸 (JV)	1,500	11/7～3/2	①
平成24年度	竹松遺跡 (路線) (TAK201202)	大成エンジニアリング柳長崎営業所・柳創建 (JV)	[10000] 終了面積9,000	5/18～3/1 変更～3/15	②
	竹松遺跡 (路線) (TAK201208)	扇精光伸・柳三基 (JV)	[5000] 終了面積6,300	8/31～3/14	
	中田遺跡 (NAK201205)	直営	88	7/23～8/23	
	専岩遺跡 (SEN201206)		212		
平成25年度	竹松遺跡 (TAK201301)	国際文化財柳長崎営業所・柳大信技術開発 (JV)	11,500	5/27～1/15	③
	竹松遺跡 (TAK201302)	大成エンジニアリング柳長崎営業所・柳創建 (JV)	[13000] 終了面積13,557	5/27～3/18	④
	竹松遺跡 (路線) (TAK201303)	扇精光伸・柳三基 (JV)	[5340] 終了面積4,720	5/27～12/17 変更～3/14	
	竹松遺跡 (TAK201304)	柳埋蔵文化財サポートシステム長崎支店・柳大信技術開発 (JV)	[9000] 終了面積9,900	6/27～2/4 変更～2/24	⑤
	平野遺跡 (HRN201305)	大成エンジニアリング柳長崎営業所	1,700	6/26～10/15	
平成26年度	竹松遺跡 (TAK201405)	大成エンジニアリング柳長崎営業所・柳創建 (JV)	[7,900] 変更9,487	5/28～1/21 変更～2/27	⑥
	竹松遺跡 (TAK201404)	国際文化財柳長崎営業所・柳三基 (JV)	7,720	5/30～2/10	⑦
	竹松遺跡 (TAK201407)	柳大信技術開発・柳プロレック (JV)	[6,010] 変更6,876	7/1～2/9 変更～3/6	⑧
	竹松遺跡 (TAK201406)	柳島田組・扇精光伸 (JV)	4,920	7/3～2/9	⑨
	竹松遺跡 (TAK201403)	柳埋蔵文化財サポートシステム長崎支店・扇精光伸 (JV)	6,320	5/28～10/20	⑩
平成27年度	竹松遺跡 (TAK201501)	国際文化財柳長崎営業所・柳三基 (JV)	4,400	5/29～1/20	⑪
	竹松遺跡 (TAK201502)	柳大信技術開発・柳プロレック (JV)	2,800	5/29～1/7	⑫
	竹松遺跡 (TAK201506)	国際文化財柳長崎営業所・柳三基 (JV)	2,180	8/5～2/19	⑬
	上三反田遺跡 (KST201517)	柳大信技術開発	275	1/12～2/26	
平成28年度 (8月時点)	一里松遺跡 (ICH201601)	柳大信技術開発	580	4/18～6/20	
	三城城下跡 (SJK201602)	大成エンジニアリング柳長崎営業所・柳創建 (JV)	1,470	5/25～8/26	
	竹松遺跡 (TAK201604)	国際文化財柳長崎営業所・柳三基 (JV)	2,300	6/20～10/11	⑭

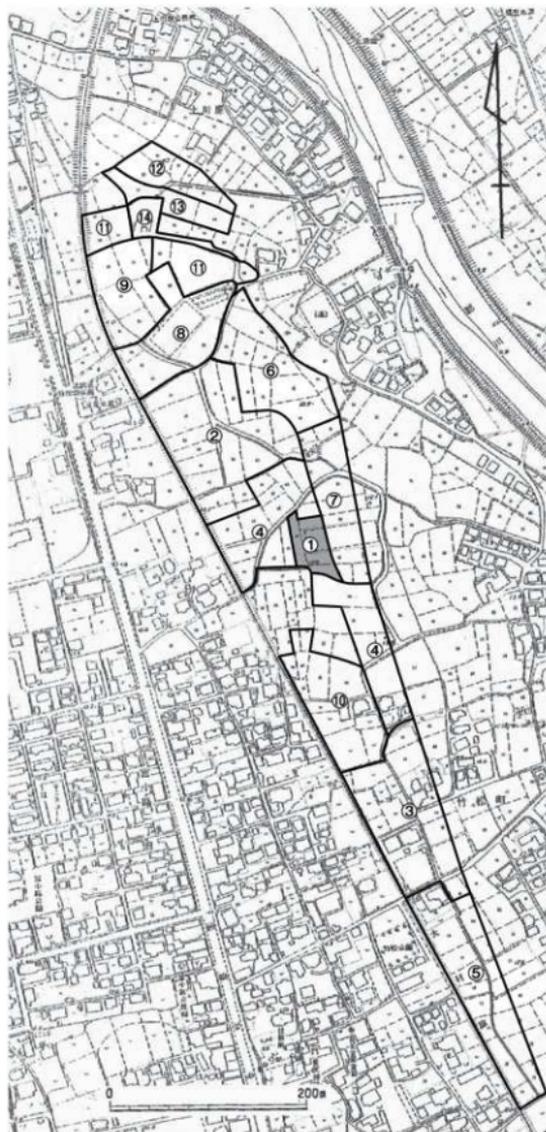
〔 〕 は当初契約の面積



写真22 作業風景 1



写真23 作業風景 2



- ① TAK201108 (報告分)
- ② TAK201202
- ③ TAK201301
- ④ TAK201302
- ⑤ TAK201304
- ⑥ TAK201405
- ⑦ TAK201404
- ⑧ TAK201407
- ⑨ TAK201406
- ⑩ TAK201403
- ⑪ TAK201501
- ⑫ TAK201502
- ⑬ TAK201506
- ⑭ TAK201604

第30図 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）大村車両基地発掘調査区位置図（1/5,000）



## 報告書抄録

ふりがな	たけまついせき							
書名	竹松遺跡1							
副書名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	新幹線文化財調査事務所調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	浦田和彦・堀内和宏・東郷一子・江口喬裕・新久保恒和							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2番13号 TEL095-824-1111							
発行年月	西暦2017年2月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけまついせき 竹松遺跡	長崎県 大村市 竹松町 1021番地他	42205	086	32° 57° 15″	129° 56′ 45″	20111107～ 20120302	1,839	九州新幹 線西九州 ルート （長崎 ルート） 路線部建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
竹松遺跡	包含地	・縄文  ・弥生  ・古墳  ・古代  ・中世	・旧河川跡    ・井戸	・縄文土器 石器  ・弥生土器 ガラス玉 ・雁股鉄鏝 耳環 ・土師器 須恵器 紡錘車 ・滑石製石鍋 ・越州窯青磁、 白磁 ・緑釉陶器				

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第4集  
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

## 竹松遺跡 1

平成29(2017)年2月発行

発行者 長崎県教育委員会

〒850-8570 長崎市江戸町2番13号  
TEL095-824-1111

印刷所 株式会社 昭和堂

長崎県諫早市長野町1007-2  
TEL0957-22-6000